393
756

東亜研究講座
第二十一輯

漢藥の話

中尾萬三著

393-756
1200501462607

始

30
75

藥學博士 中尾萬三著

漢藥の話

東亞研究講座
第二十一輯

東亞研究會發行

帝國圖書館藏

藥學博士 中尾萬三 著

漢藥の話

東亞研究講座 第二十一輯

東亞研究會發行

393-756

漢藥の話

藥學博士　中尾萬三

往古の藥は大抵天然品を用ひたから、各國其天產品を異にするに從ひ、用ふる處の藥も亦異るものであつた。我國にも所謂和藥と呼ばれる藥があり、夫等の處方を集めたものに大同類聚方と言ふ書物があつたが、夫れは亡びて無く、現に同名を附して居るものは僞本である爲め、我國古來の藥が如何なるものであつたか、極く少數の古文獻に誌されて居るものゝ外は分らぬと言ふ方が適當である。但近年まで和藥屋と言ふものが有り、所謂和藥と稱して賣つて居たが、夫等の多くは寧ろ民間藥と稱すべきもので、特に系統のある醫說のもとに用ひられて居た漢藥とは比較になる可きもので無く而も其藥の多くは我國と支那との地理的關係が畧ぼ同じき爲め、西洋藥と漢藥との間にある程の區別もなく大抵の和藥は漢藥の內に含まれるものと同樣であり、又た其効

能の如きも詮索すれば漢藥の一部に記されて居るもので和藥に就ては事々しく言ふ可き程のものが無き樣である。此の如く我國特有の藥の分らぬ事は甚だ殘念なる事であるが致方がなく、殊に往昔に於ける支那の醫術は其時代に於ては最も進歩したものであり、藥も亦古き來歴と共に用ひられたものである爲め、我國に於ても多くは支那の醫術が用ひられ、藥も支那の藥、卽ち漢藥が盛に使はれた。奈良、平安兩朝の古き制度を見れば、其醫藥に對する制度は支那の模倣であり、醫藥學生の習ふた教科書の如きも支那のもので、現今の藥局方に當る本草の書物の如きも唐の新修本草が用ひられて居り、所謂漢藥なるもの丶使用は西洋の藥が輸入されるに至るまで我國人には相當長く續き、現今に於ても殆ど西洋の醫藥が使はれながら猶ほ漢藥が一部に用ひられ、近頃に至つて漢方が復流行し出した如きも亦此の如き古き由緒に基く爲めでもあらう。若し此を支那にして見れば數千年に亘つて用ひて來た藥であり、其效顯の如きも眞僞は別として屢々文獻に誌されて居り、自國の藥と言ふ點に於ては、漢藥に對する信仰は我國人より一層强い。果して漢藥が事實に於て效能の顯著なるものがあるか、或は古き歴史を持つ爲め惰性的に夫れが殘つて居るものであるか、此等に就ては殆ど近代の科學的研究が試みられて居なき爲め、無暗に漢藥を賞揚

し、或は一概に之を排斥するわけには行かず、尙ほ多くの學術的研究の結果を觀て論ず可きで、漢藥の研究と言ふ事は藥學の方面に於て殘されて居る大きな問題である。而して此等の事を明にするには醫術の方面に於て素問靈樞より初まり證治準繩等に至る迄の醫書の研究の必要なるが如く、藥の方面に於ては神農本草經より本草綱目等に至る本草の研究を以て重しとする。

我國では本草の學問を以て恰も博物學の如くに思ふ人がある。是は甚だしき誤りで、本草は全く現今の藥局方に當る可きものである。故に本草に誌す所は單に藥品の名目並に形狀のみに止らず、其良否、眞僞、產地、性狀等を述べ、藥品使用に關する注意、丸、散、膏、煎劑等に關する標準を示し、又效用にも亘つてゐる。其躰裁元より現今の局方と全く相等しと言ふ事は出來ぬが、大體に於て藥の標準を明示する點に於て之と等しきものである。我國の本草學者は大抵漢方醫者であつたが、泰西の博物學が我國に入り、本草に誌す所のものを分類するに泰西の學術に依る方が發明する所多き爲め、醫術に應用すると言ふ興味よりも其分類に興味を持つた人の方が多く、夫れが爲め本草の主旨は忘れられて博物學の樣に思ひなされた次第であり、漢藥の研究が相當長く捨てられて居たのも、一方西洋醫術の消化に年月を要した爲めでもあるが、又一方に於て此の

如き事にも原因する。從つて茲には漢藥に就て其一般を畧記して見度い。

漢藥の一般

本草綱目は明の李時珍が編述する處で嘉靖二十一年に初めて着手し、萬曆六年に脫稿し、二十數年を費して作つた大部の書物であるが、此れに集められて居る漢藥の總數は千八百九十余種で此の後に本草綱目拾遺の如き著書があり夫等各著書のものを集むれば、二千種以上の漢藥があり此等の藥を用ひる處方を集むれば本草綱目に記すだけでも八千種以上ある。但し現今一般に用ひられて居る漢藥の種類は約五百種程であつて夫等を大別すれば左の通りに分類する事が出來る。

第一、植物性の藥材　第二、動物性の藥材　第三、鑛物性の藥材　第四、加工的の藥材

第一の植物性藥材は漢藥の大部分を占め所謂草根木皮を以て目せられるもので、本草なる名が起るのも亦此の種の藥が最も多い爲めであると謂はれる。但し本草と言ふ名が之れが爲めに起つたかどうかは疑問で他に原因があると思ふが之れに就ては別に述べる事とし、植物性藥材が漢藥の大多數を占める事は事實である。第二の動物性藥材は鑛物性藥材と共に其數は少く、兩者を合しても尙ほ第一の數には及ばない程度にある。第四の加工的藥劑と言ふのは頗る簡單な操作を天

產品に加へたもので、現今の化學的に合成されたものでは無く、謂はば調合的に作られた如きものも有る。尙ほ此の部に加へる事は無理であるかも知らないが、迷信的に或は傳說的に醫療上效ありとせらるゝ器物、或は護符の如きものもある。此等は元より少數であるが藥に此の如きものもあると言ふ事は、禁厭と醫療とが互に接近して其間に區別がなかつた時代のある事を證する名殘りで歷史的には甚だ興味あるものである。

現今の考へで藥と言へば「病氣と言ふものに對しての藥」であつて純醫療用のものを指すのが通常であるが、漢藥の內には病氣で無くとも用ひるもの、今で謂へば滋養劑とか强壯劑とか言ふ部に屬するものが有り、此の內には平素飲食する所の、穀類、肉類、蔬菜、香味、釀成品等が含まれて居る。此の如きものを含んで居る事は周禮に誌す制度に食醫なるものがあり、嚴重なる規則を飲食物に適用して健康の增進と疾病の治療とを爲した事の遺風とも見られ、又た神仙を說く方術の士が稱道した服餌の說の名殘りとも考へられ、此等は根本に於て相ひ通ふ樣な處を見出し得るものであるが、「藥」なる文字が單に醫療的のもののみでなき事は此れ亦漢藥を研究する上に於て興味がある事であると同時に頗る注意を要する事で、本草に誌す藥が悉く皆、その初めに於て醫

療に用ひられたもののみとは謂ひ難く、神仙服餌の說の如き目的の藥品とせられたものゝ有る事をも知らねばならぬ。本草を讀み漢藥を取扱ふ人は此の如き點に於て、或る藥品が初めより純醫療的のものであるか、或は他の用途の藥品であるかを識別する必要がある。

蓋し古を貴ぶは支那の風習である爲め、藥も相當古き時代から其儘に傳はつて居り、古名と今名と頗る異るものがあるが、尙ほ其來歷より考へて至つて古きものである事を知るに難く無いものもある。勿論時代に依て多少其藥效に差異の生ずるは當然の事であるが、夫れでも古きまゝの傳說は其藥に殘り、全然其藥が亡びて用ひられなくなつた如きものは僅少と謂つて差支へがなく有名なものに於ては累代其效能が說き加へられて居る。併しながら必ずしも其藥が效くと速斷するわけには行かぬ。殊に漢藥の使ひ方は單味で效を奏するものは其醫說から言つて少く、多くは複方として用ひられる爲め、漢藥を效力上から分類する事は多少困難であり、又近代學術的の研究も充分で無き爲め夫れを敢てする事は好ましく無き事であるが、俗に效くとか效かぬとか言ふ如き甚だぼんやりした效力上から漢藥を觀察するなれば、其の內に(イ)近代の藥局方に收錄されて居るもの或は臨床上の實驗を經て效力ありとせられて居る如きものの一簇、次に(ロ)實際の

效果は疑問として其藥の來歷には傳說的に迷信と言ふ可き分子を含むんで居るものゝ一簇、又(八)藥品の外形、色度、香味等が他と異る事著しき爲め效力ありとせられて居るもの、此の內には(イ)或は(ロ)の部に入る可きものが有るかも知れぬが、其特長が色、或は香ひの如き他に比して極めて顯著なる區別を有するものである爲め、是れ亦一簇として纏め得る。

先づ(イ)の部に甘草(Glycyrrhiza glabra)遠志(Polygala tenuifolia)大黃(Rheum officinale)龍膽(Gentiana scabra)等の如きがあり、漢方に言ふ效能と現今の夫れとは異る所もあるが現今も藥局方に收錄せられて醫療に用ひられて居る。又は麻黃の如きはエフエドリンなるアルカロイドを含み夫れの研究は既に長井博士に依て化學的構造式まで定められて居たが、治療上の效果は漸く近年に至つて認められるに至つた。此の如きは藥の主成分が早く分つて居ながら其醫學的研究が長く捨てゝあつた爲めである。近來朝比奈博士の手に依て牽牛子の成分が西洋のヤラツパ根の成分と同じものである事が分り、又た吳茱萸の成分から產科に用ひ得る成分が分離された如き、追々藥學的の研究が進み、夫れが醫學的の研究に依て其效力が定められる時に於ては、從來單に經驗により藥效を云々して居たものが、確然として學術的に效顯を定める事が出來、又傳說的に

用ひ來たもの或は迷信的に藥になつて居るもの等の如きは實際に於て卓効が無きこと等が分るであろう。彼の黄著、鐘乳石、丹砂の如きは古代に於て卓効ありとせられたものであるが、現今に於て鐘乳石は炭酸石灰であり、丹砂は朱と同成分の硫化水銀である事が分ると誰れも夫を服して長生不死を願ふ人も無く、黄耆の如き殆ど何等の抽出物を見出さぬものにあつては夫より醫療上直ちに反應する如きものが有るとは想へず、本草に諸藥の長老として各種藥劑の中和を計るものと謂ふは反つて無害無効と言ふ點からは大に當つて居る如くに想はれる。又は彼の人參、五加皮等が漢藥中に於て大に持てはやされるのは其等植物生育發達の狀態が五行說に適ふ如き爲めで此れが大に効能に關係があるとせられて居る、陰陽五行の說は支那の古代から有る說で戰國、秦漢を經て盛んになり、大抵の現象を說明するに之を適用するもので甚だ用ふるに便利な說であるが、此れを適用するに最も都合よき植物は卽ち五加科(Araliaceae)に屬する植物である。此の科の植物が生育する狀態を觀察するに、先づ天地人の三才に象る如くに莖を分岐する。次に葉を生ずるや、水、火、土、木、金の五形に象る如く葉に鋸裂を生じて掌狀を爲す。玆に陰陽五行說を適用する人は、此の植物の生育狀態は全く五行に象るものであるから、其効能は自然のまゝに

人間が生育するに適し、此を用ふるなれば健康は增進されると說くのである。此等五加科植物の成分は別として此の如き說に依て藥の効能が擴大されて居る事は近代的に研究する際大に注意すべき事である。彼の人參の如きは實際の藥効と言ふ事よりも寧ろ其形態に依て其價値に上下があり、支那の人は之を藥として見るよりも寶貴すべき珍品として見る如き傾きがある。所謂人參の上等品は朝鮮にしか產出せず、而も其完全なるものは開城の附近に限られて居る、此の人參を服用する支那人の所望するものは、先づ頭首に當る部分があり、次に肩がすぼんで居らず、兩手の形もあり、胴も夫れに適應した太さと長さを有し、脚に當る根が又た確かりして、大體に於て人間の形をして居る如き人參で此の如き形のものは開城附近の產出に限られ、其河を一歩南に渡つても出來ぬ。故に日本、朝鮮の他の土地、或は米國などに人參は出來るが、右の條件のものは殆ど無く開城の人參が獨り其名聲を壇にして居る。同じ人參であり乍ら形に依て其効力が異ると言ひ其値段に格段の差ある事は甚だ妙な事であるが需用者が古來の傳說を信じて此差を生ぜしめるのであるから致し方もなき次第である。人參が此の如く重視される原因には種々の事情がある。先づ第一に人參の生育には數年を要する事、而も其生長の間に蝕ひの如きものが出來れば忽ちに其

價値がなくなる事、此れは容易に完全な人參が採れぬと言ふ事であつて例令之を栽培するにしても同樣の條件が伴ひ從つて完全なものは高價となる。右の如く藥用に供し得る迄の發育に數年を要するから、天然產の人參を採集すれば容易にそのあとの物が採れぬ、卽ち種子の發育また數年を待たねばならぬ。此の如き理由の爲めに、支那に於ける人參の名所は山西省の潞黨であつたが其種は遠き昔に於て無くなつて、先づ支那本部では文化進み深山が開拓せられるに從ひ人參の產出は絕えた。そこで人參の產地は人跡疎なる遼東卽ち滿州方面に轉じた。謂はゞ自國に出來るものが無くなり遠き處にまで其產地が移つたのであるから人參の價格が昇貴するは當然で、之に從ひ其効能も亦一層大切なものとされるに至つた。次で又遼東の產出が少くなり朝鮮に之を求める事になりてより、一層人參の聲價は加はる事になり、殊に淸朝の時代、遼東に產出する人參は滿州出身貴族が收入の一として濫りに採集を許さなかつた爲め彌々藥品中に於て高價なものとなり藥効の如何は別として寶貴される事になつてしまつた。此の如き事情の外に小兒の眞陽は人をして長生不老ならしめると言ふが如き僻說があり、夫れが爲め人參の效力は夫れと同じきものと過信され諸藥の王たる如くに後世に思ひなさるゝに至つた。古へに於ける人參の效用は左程にも誌してないが、諸種の事情が漸次人參をして此名聲を高めしめたことは疑を容れぬ。此等は直ちに夫れと斷定する事は出來ぬが（ロ）の部に入るものであらう。

次には（ハ）に屬するものであるが、此れには支那の醫說が大に關係を持つ。支那の醫說なるものは半ば哲學的で極めて抽象的であり、毫も其基礎を實驗に置いて居らず、陰陽五行說を以て說明せられて居るもので、殊に古傳する醫書には傳寫の誤り、注解の混同等があつて、頗る錯綜し支那の醫人すら難解に苦むものであるが其大體に於ては人間を一個の小なる自然と見做し、疾病の起る原因の如きも小自然界に於ける不調和の部分あるに依るとし、身體各部機關の說明の如きも、此の如き假說のもとに陰陽五行の說を交へて說明する。例令ば支那は各國の中央に在りと考へ、若し之を色にて表はせば黃色に當り、黃色は五色中の最も正しき色に屬するものとする、故に吾人躰內諸機關中の主要なる部分の色は黃色にて代表せしめ得べく、從つて黃色を呈する藥品は主要なる機關の病を治すに適し效力偉大であると謂ふ。故に黃蓮（Coptis anemonaefolia）黃芩（Scutellaria baicalensis）黃蘗（Phellodendron amurense）の如きは大に重ぜられて居る。此等の藥品は何れも黃色を呈し、其成分として黃色の色素を驗明し得、夫等の化學的構造も分つて居

るものがあるが、夫れが直ちに醫書に言ふが如き效能を有するものとは現在に於ては考へて居られず、他に使用の用途を求めつゝある狀態にある。又た丹參（Salvia miltiorhiza）の如きは其根の色が新鮮なる時に於て血紅色である爲め、直ちに血液を補ふ藥として用ひられて居るが、予の實驗する處ではオルトヒノンに屬する赤色の色素が採れ其性質は血液のヘモグロビンの如きものでは無く、血液を補ふものとは思はれない。殊に此の赤色の色素は水に溶けぬ爲め、酒にて飲用する樣に誌されて居るが、此の如き用ひ方は丹參が效くと稱するよりも寧ろ酒が效くと言ふた方が適當の如くに考へられる。此等は色の例であるが、香氣の高いものも大に藥用に供せられる。蓋し香氣は人の好む所である爲め、芳香を有するものが藥として用ひられる機會は他のものに比して古代に多かつたろうとの想像は誰れしも爲し得る事である。若し往昔に溯つて神の存在を疑はなかつた時代を考ふるなれば、人間の好む香氣は神も亦之を好むと考へ、神に依て福を得或は之に依て禍を除き、或は神に乞ふて病を治さむと欲する場合に芳香あるものを用ひたとするは決して無理な考では無い。從つて動物性の藥品に麝香の如きがあり、植物性の藥品に香氣の高いものが含まれて居る數は相當に多い。柴胡、蘭草、紫苑、白芷等何れも夫れに屬して居るもので、

此等香氣の主成分は何れも芳香揮發油と稱せられるものに屬し、夫等の成分は追々明瞭になり、麝香の如きは近頃に至つて人工的に合成する事が出來る樣になり、藥と言ふよりも寧ろ香料と言ふ意味に於て多く用ひられて居る。樟腦、龍腦の如き何れも之に屬し、樟腦の如きは所謂カンフル注射を行ふ時の必要なる藥であると同時に又た工業上セルロイドに使はれ其方の用途の方が多くなつて居る。從つてテレビン油を原料にして龍腦を作り更に夫を樟腦に變へる如き事は外國に於て大仕掛けに行はれて居り、薄荷の如きも近來大に人工品が出來つゝある。即ち香氣の顯著なものは昔から藥ともなり化粧品ともなり、昔は化粧品として使ふ場合に於ても、辟邪と言ふ如き藥效的の意味を付して用ひて居たが此の如き考が時代と共に少くなり、今は藥と言ふより專ら化粧品として用ひられる樣になりつゝある。又た芳香の反對に惡臭を有する如きものは病氣が之を嫌ふであらうと言ふ如き考へのもとに用ひられて居るものもある。此の如き色或は香氣の外に、其藥品の形狀が人體の或る部分に似たりとし、其似た部分の疾病を治すと思はれて用ひられて居る如きものがあり、此等は漢藥の成分を研究し、或は其藥效を定める上に於て甚だ注意すべき事項である。

右は漢藥を分り易く言ふ爲めの分類であるが、本草に於ては藥品の性質、卽ち有毒であるか無毒であるかに依り古くは分類して居た。支那の醫藥に對する考へは元來が純醫療藥品のみを「藥」として取扱ふものでは無く、夫れを用ひて、人間が無病健康であり、遂には不老不死と言ふが如き境域に達し得る如きものをも藥としたから、其分類に於ては、此の如き藥を以て最上品とした。勿論是は服用して無害無毒であり、而も效能あるものとされて居る。扨て此の次に病氣を治す藥卽ち現今專ら藥と稱せられる如きものが、卽ち中品の藥で、平素連用しては人身に害を及ぼすが病氣は此れに依て治ると稱せられるものである。此の次は下品の藥で此れは有毒である。然し乍ら病氣を治すには此を用ひ無ければならぬもので、此れこそ純醫療的の外は用ひぬものである。卽ち藥に上中下の三品があるわけで、之を細かに分類すれば、三品の中に又た上中下の區別を生ずる事になる。此の如く漢藥を性質上から分類して置き、夫々の部に草木禽獸魚介虫鑛物等のものが含まれて居て其特有の效能を顯すと言ふのが古き分類の仕方である。此の分類法は藥の名稱と共の物とをよく知るものには甚だ便利であるが、後世藥品の數が增加し度々の增補を見るに至ると、虫の部に魚が入り、或は木の部に虫が加はる如き混雜が出來、本草を學ぶ事が醫家の苦し

みになる。其處で此の分類を改良して編述したものが李時珍の本草綱目で從前の上中下をやめ新に當時の自然分類による分類に全部を改めた。夫れが爲め本草を見るものは其れに記載されて居る個々のものに就ては便利を得る樣になつた。但し此が爲め俗醫には古傳する處の藥效に關する智識が不確實になり上中下の區別を知らぬものさへ出來る樣になつた。勿論此れは李時珍の罪でなく、知らぬ者の罪であるが、藥を此の如く分類したと言ふ事は又た前にも言ふ如く本草が博物學の如く思はれる一原因をも爲した。

漢藥と外國の藥

漢藥が頗る多くなつた事は、時代の進歩と共に藥品に關する經驗が加はり、從來藥として用ひなかつたものも亦藥とされる如き事から其數を增加したでもあらうが、一方には支那の版圖が擴張され、夫れと共に外國との交通も起り、夫等の藥をも取つて用ひたと言ふ事も藥品增加の一原因を爲して居る。蓋し上古の支那は山西省を中心とし、極度の文明に達して居たと謂はれる周の時代ですら現今の支那に比べて面積は少く、東方の海岸地方には異民族を以て目する人々が住み揚子江の南も亦他國の如き取扱ひを爲して居り、西及び北からは反て支那人が異民族の爲め壓迫

されて居る如き形勢にあつた、從つて其時代の藥品は大體に於て當時支那の範圍內卽ち山西方面に片寄つた地方の天產物が用ひられたものと考察する事が出來る。但し其時代の藥品が如何なるものであつたかは確かに知る事は出來ず炎帝以來の藥品を誌すと謂ふ神農本草經ですら西紀前後に出來たものとしか思はれないから非常に古い時代の藥は不明と言ふ方が間違ひが少い樣である。今假りに此の本草經をもとゝして調査して見るなれば大體に於て所謂中華と言はれは地方のものが多く、一般に言つて北支那に產する植物が大部分を占めて居る。處が後世に至るに從ひ版圖が擴大されると共に、植物帶も擴がり、或る藥用植物が原の藥用植物に似て居る樣な場合には夫れを以て原植物に充當し、夫れが爲め、名は同名であるが物は異つて居る如きものが出來て居る。此の如き次第であるから、支那各代の本草家が其本草の編纂に從事する時、何れを正しとするやの如き疑問を生じ夫等に就ての諸說がある事は今日より見て當然の事である。從つて今日に於ても尙ほ南北土地を異にするに依り、或は其地方の分るゝ爲め、同名異物のものが相當に存在する。殊に我國に於ては此の誤りに在るものが少くない。我國維新前の本草學者は支那の本草を基として我國に行はれて居る漢藥に就て或は圖譜を作り或は圖說を述べて大に漢藥を研究するもの

ゝ便宜を殘して置いて吳れた事は多とす可きも、無理に我國の植物を支那の夫れに充當して誤りを傳へて居るものもある。例は黃耆の如きは支那に於て旣に色々異つたものが用ひられてる。湖北省附近のものは Astragalus Henryi, Oliv. であると謂はれるが南滿州では Astragalus dahuricus, DC. を充て、我國に於ては Astragalus reflexistipulus, Miq を黃耆とし、若し古本草の示す正しきものを撰ぶとなれば Astragalus Hoantchy Frauch 或は Astragalus dahuricus, DC でなければならぬと謂はれて居る。左に本邦の本草學者に依て誤り傳へられて居る二三の例を示して見やう。卽ち現藥局方に莨菪と記されて居るものは、Scopolia japonica, Max ヘシリドコロを充てゝ居るが此れは本草に謂ふ莨菪には一致せず、本草の莨菪は正に Hyoscyamus niger, L. ヒヨスでなければならぬ。是れに就ては證類本草の繪を見れば直ちに夫れと知り得るものであり、予は天仙子卽ち莨菪の種子を研究して夫れを確證し得た。但し莨菪は日本に產出せぬ爲め今に其誤りは訂正せられずそのまゝになつて居る。此の如く間違つた原因は元來ヒヨズが日本に野生しない上に、本草綱目に入れてある圖が證類本草の繪とはちがひ甚だしき想像に任かして描かれて居る爲めである。李時珍は南方の人であるから北方に生へるヒヨス卽ち莨菪の現物を見た事がなく、唯

だ昔からの記載に依て想像的に圖を造つた爲め、此誤りを來したものと思はれる。次に掲げる三つのものゝ如きも我國に產出せず、夫れが爲め强ひて我國產を充てたものである。其內蛇床子の如きは昔の漢方醫が殊の外に支那產を以て上等としたものであるが、予の實驗する所に依ると支那產の主成分と目すべきはピ子ーンを多量に、イソヴレリアン酸ボルニールエステルを含む揮發油であり、又防風には多量のマンニツトを含んで居る。日本產の夫等が同樣であるか否やは實驗を經ないが、恐らく植物の科まで異るから其成分も亦異るものであろう。現に朝鮮產のものは蛇床子にヤブジヲミを充て、夫れより採れる揮發油は異る成分である。

本邦產の誤れるもの

莨菪（はしりどころ）	Scopolia japonica, Max	茄科
防風（はまにがな）	Lactuca repens, Maxins	菊科
丹參（くわがたさう）	Veronica cana, Wall	玄參科
蛇床子（はまぜり）	Selinum japonicum, Miq	繖形科

支那產の本草に記すもの

莨菪	Hyoscyamus niger, L	茄科
防風	Siler divaricatum, Bth et HK	繖形科
丹參	Salvia miltiorrhiza, Bge	唇形科
蛇床子	Conidium Monnieri, Cuss	繖形科

此等の本草に誌す支那產のものは、實物と記載とがよく一致するが日本の誤れるものは一致しない點がある。故に維新前我國の漢方醫者でも藥をやかましく言ふ人は特に支那產のものを取り寄せた。又た幕府等に於ても出來得る限り支那の種子或は原植物を取り寄せて全國或は地方に普及させむと計つた。此等のものは當時の記錄も有り、直ちに夫れと知るに難くないが、此處には夫等に就ては述べる事を避ける。

次には漢藥の中には外國から輸入せられたもので、夫れが全く支那產の樣になつて終つたものもあり、又支那では出來ぬ爲め歷代支那に輸入されて居るものもあり、又た近時の如きは支那に於てのみ賞用されて居る爲め、外國から支那向きとして輸出するものもある。此の如きものは反て本國人の氣付かぬ所に興味がある。例ば鹿の角の如き支那では藥材として相當に用ひられるが

其上等品は反て日本の鹿の角で、奈良の鹿の角は細工に使はれる爲め支那に出す程の量がなく、丹波或は北海道から輸出せられ、厚朴の如きも支那產と日本產との間には可なりの區別があるけれども外觀が變らぬ所から支那の人は之も日本の北海道から買つて行く。殊に面白いのは牛黃で之れは牛の結石で病的に生ずるものであるが、漢藥では特に貴重され値段がよい爲め、アメリカの如く牛を澤山殺す所から集められ夫れが大阪に來、更に支那に輸出されて居る。此のアメリカ物の牛黃は余りに效かぬと稱せられて居るが此れは形が在來のものと異る所から、斯く言はれるものであるかも知れぬ。右は現在に於ける狀況であるが昔に於ても支那に輸入されたものが少くない。

元來支那は現在の位置から言つて山西省に當る邊が漢民族の國を起した所であり、其隣りには或は戎と言ひ或は胡と呼んだ異民族が居り常に文明の程度の高かつた支那に侵入せむとし、夫れが爲め古代の爲政者は常に之を鎭壓するか或は征服するかに苦心をして居た樣である。卽ち秦の始皇帝が長城を築いた事は之を證するものであるが、此の西方の異族の更に西には後に所謂西域三十幾國と稱せられる如き國々が有つたと考へられる。從つて漢の武帝が西紀前百年頃に張騫を西域に遣はし其交通の端緒を開始する以前に於て夫等國々のものも支那に將來されて居たであろうと思はれるが、張騫が使した時のものでさへ充分に知り難いから夫れより以前のものは勿論不明である。史記に葡萄、苜蓿の如きは張騫が將來したものであると誌されて居るが、夫等は今に於ては反て支那固有種の如くになつて居る。又た如何なる時代に何人に依て支那に持ち來されたかは確實に分らないが、胡瓜(きうり)、胡桃(くるみ)、葫(にんにく)、胡麻(ごま)、胡椒(こせう)、胡荽(こえんどろ)の如きは何れもも皆字の頭に胡と言ふ字がある爲め夫等は皆支那以外の西方諸國から將來された事は明であり又た夫れを證する事も出來るが、今ではそんな來歷を問ふ人もなく、支那のものとされ、別に外國より取り寄せずとも支那に於て澤山出來る。西瓜(すゐくわ)は西の字がある處から此れ亦西方の產物と知られ燉煌瓜の異名があるが、燉煌は今でこそ甘肅省の西の端にあるが其昔は先づ異域と稱せらるべき處で、武帝が西域遠征軍の根據地であつた處である。從つて西瓜が更に其西に產し支那に輸入されたものである事ばトリキスタン邊の西瓜が今も尙ほ其味に於て諸國產に冠絕して居る事實よりしても之を知る事が出來る。又た柘榴(ざくろ)は之に安の字を付して安石榴と呼ばれるが、此の安の字は安息國の安であつて其起原が安息

に在る事を知り、ザクロと言ふ日本音は支那の古い音を傳へると共に夫れがペルシヤ音の寫しである事を考へ得る。蔓蔆草(はうれんさう)と言ひ茉利花(もうりんくわ)と言ひ無果花(いちじく)と言ひ今ではその始めが西域種であると知る人も無き程、支那並に日本では普通になつて居るが、夫等の音を考ふる時に於て明に西域のものと考へる事が出來、其來歴を調ぶれば一層西域種である事が明になる。而して此等は現今に於て普通の蔬菜或は果實として取扱はれて居るが、其將來の初期に於ては可なり貴重な外國の産品で夫れが本草に收錄されて居る文面を見れば藥として相當效能ありとせられて居た事が分る。殊に砂糖の如き今では誰れも珍らしくは思はぬものであるが凡そ唐時代以前に於て夫れが貴重なる藥品として取扱はれて居た事は明であつて、砂糖の精製されたものは石蜜と稱せられ其製法は支那に於ても困難とされたものである。此の他に樹脂、バルサムの類で支那で貴重な藥品とせられ夫れが西域産であるものが少くない、沒藥(もつやく)、蘇齊(がるばーぬむ)、阿魏(あぎ)、安息香の如きは夫れで、安息香は字が示す通り安息國の産品であり其正體が分らぬ時代には獅子の糞と言ふ如き謬說さへもあり、蘇合香と共に諸種の小說に引用され、つまり陸路行人の疎れな砂漠を越ゆるか、或は海路萬里の波濤を冒かして行かなければ得られぬ國の産物は漢藥に於ても卓效ある部に列せられ殊更に奇怪の效能を附會するものさへある。

前に漢藥中には香料中に加はる可きものが相當あると述べたが、實際に於て支那固有の上古から知られて居る香料は貧弱なもので、神を祠るに艾(よもぎ)を燻らす程度で、古く蘭と稱せられるものはフヂバカマであり、椒と言ふのはサンシヤウである、屈原の楚辭等にある匂ひの高い草木と雖、其芳香は左程までゝなく、殊に一時的で永續的の芳烈なものではなかつた。然るに海路南方熱帶地方との交通が始まり出すに從ひ、極めて香氣の高い、而も永續的の香料が支那に入り漢藥にまた夫等が採錄される事になつた。丁香(ちやうじ)の如きは鷄舌香と稱せられ口臭を防ぐ爲め既に漢代に於て用ひられて居り、此の如き遺風は現今トルコ邊に於て見られる所である。佛教に於て貴ぶ白檀、沈香等は六朝の時代に於て盛に使用せられ、蓽茇、白豆蔻、肉豆蔻、甘松等熱帶産のものは續々と輸入され香料として或は藥品として用ひられる樣になつた。薔薇水の如き從來は薔薇の花の露を採るものと思はれて居たものが、宋代になると香氣芳烈な西域産薔薇花を集め、夫れを蒸餾に付し、其餾液を集めたものである事が分り、夫れを硝子の瓶に貯へ置いても其

匂ひは四散し、其芳香は人衣を數十日間も去らぬといふ迄の智識を得、漢藥に關する知見は宋代に於て大に擴められた。

本草と醫術

蓋し支那の藥は度々言ふ如く單に醫療的のもの計りで無く、健康を增進し不老輕身と言ふ如き效あるものを上品として居るのであるから藥と稱せられるものと、所謂神仙を求め不老不死を說いた方術の士との間には大なる關係がある如くに思はれる。本草と言ふ語原の如きも漢書郊祀志成帝の處に出て居るが始めで、此時代の本草なる文字は醫藥と云ふ意味よりも仙藥と言ふ意味を含むで居る。故に成帝が方術の士が專ら掌る神祠或は神仙祠を罷める時、「方士使者副佐使本草待詔七十餘人皆歸家」と誌し、本草を以て待詔する如きものを方士と同樣に取り扱つて居る。若し本草を修めるものが純醫療の方藥を掌つて居るものなれば此際家に歸される理由はないのであるが本草の內には仙藥と言ふ意味を含むで居る爲め、特に方士等と共に罷められたものと思はれる。故に醫術あつての本草では無く、本草と醫術とは元來が別々であり、寧ろ本草の方が長生不老を修める點から一歩貴きものと其時代の人は考へて居たかも知れぬ。卽ち仙方を修める內には病を治する如き事は小術として含まれて居り、從つて藥の分類に於ても上藥、中藥、下藥の區別を立つるものと推察し得る。此等に就ての考證は他日に讓るも、大體に於ては山海經の如き書物が方術の士に依て讀まれて居り夫等の中に誌す藥の中から特に草木に關するもののみを集めたものが本草と名付けられ、本草家は夫れにより不老不死並に病氣を療する方法を修めたものと思はれる。然るに不老不死と言ふ事は實際に當つて行はれず、方士等の謂ふ所は帝王の如き有力なる後援者があつて充分に行はれる事であり、社會一般としては此の如き當てにならぬ神仙道よりも寧ろ實際に必要なる醫術の方が適切である爲め、君主が神仙道に愛憎をつかすと同時に夫れが流行しなくなり、反て醫術の方は進み、玆に本草の學問が原來醫療的の分子を含むで居る爲め從來の行き掛りを捨てゝ醫療的方面に重きを置く樣になり、遂に本草が醫術の士に依て多く讀まれるに至つたものゝ如くに考へられる。張華の博物志に記す本草經の文句を讀むで見るなれば毫も醫術に關係が無き事が誌されて居るが、此の如き事は本草なるものゝ初期に於ける面影を殘すものと認める事が出來る。此の如くにして六朝に至り梁の陶弘景が神農本草經を校訂するに至り、初めて本草中に誌されて居る雜事を除き醫藥計りのものとし玆に醫療的本草なる一科が新に建設され

累代本草の基を爲し、藥局方の如き體裁となつたことゝ考へられる。故に累代本草の著者には陶弘景の如き神仙道を信奉する人が多く、又た本草中に不老輕身等の文字が處々にある事を稽ふれば、本草なる學問は其初期に於ては全く醫術と關係がなく、反て方術に關係があつたと思はれ、夫れが醫術と併行し出したのは六朝以後にあると見て差支へが無い。六朝以後唐には百二十翁甄權の藥性本草あり、國定のものとしては前に唐本草、後に蘇敬の新脩本草があり、陳藏器は之に漏れた本草拾遺を著はし、九十三翁孟詵には所謂食療本草があり、海藥、並に胡本草は外國の藥を集めたものであるが今は亡佚して傳らない。その他、四聲本草、刪繁本草、本草音義、食性本草等、皆な唐代の本草である。此の後、僞蜀の孟昶が著に蜀本草があり、宋代に入ると太祖の勅によりて馬志等が編纂した開寶新詳定本草、次いて開寶重定本草がある。嘉祐補註本草は仁宗の時に掌禹錫が重修したものであり、圖經本草は蘇頌勅命により天下藥物の圖を集めて編述したものである、徽宗の大觀二年に唐愼微は證類本草を著し極めて古方を傳へ、古本草をよく保存して居る。之を重修したものが政和本草で、後に李時珍が明代に本草綱目を造る時の種本となつた。宋代に於ける本草書の有名なものとしては上記の外に、日華子の本草、寇宗奭の本草衍義等がある。此の如く宋時代に證類本草があり、圖經本草があり、本草衍義等の著書がある事は、藥品の數が追々復雜を加へ來た爲め、古傳する所のものが錯雜し易くなり、藥品に就ての異論少なからざる爲め、夫等に備へむとして此等の新著を見るに至つたものと考へられる。

一般に支那の醫術は其原始時代に於て、醫と巫覡との間に差したる區別もなく、夫れが獨立した醫師を生ずる迄には相當の年月を費して居ると考へられる。周に醫師の制度があつたと言つても現今謂ふ如き醫師であつたか、或は巫覡を交へたそれであつたかは確かに分り難い。戰國に至ると立派に醫を以て世に立つものが出來、漢代には醫の理論も醫の技術も時代相當には進歩し、支那醫術の基礎が此時代に出來た樣である。六朝に至つて進歩を加へ、唐の時代に至つて愈々精しくなつたが、尙ほ古代より續く神仙的の氣分をも交へたもので充分とは謂へない樣である。夫れが宋代に至ると性理の學問と言ふ如きものゝ影響もあると見えて大に整つたものとなつた。本草も亦六朝以後は醫術に伴ひ、神仙の域より脫して純醫藥に向ふ傾向にある爲め、唐代色々の本草が出來て、大に昔と趣きを異にしたが、宋代に至ると夫等は醫療的の範圍に纏められ、醫家が備へ見るに便利な形にすべく編纂されて居る如くに見える。即ち前述の如き諸本草も亦此の如き

意味のもとに書かれて居る事を認め得る。扨て宋に於ける醫術は盛になり金、元の時代を經て明に至るのであるが、金元の時代には近代漢方醫の祖と仰く可き高手の醫人を出し支那の醫術は大に光彩を放つたのであるが本草に於ては宋代に於けるよりも、もつと明瞭に醫療的の色彩を加へ諸種の本草が著はされた。次いて明時代に至り、本草の學大に進むだが爲め、救荒本草の如き、本草と言ふ根本意義とは少しく異る如きものが出來、李時珍が本草綱目を造るに至り全く分類の方法を改め、本草綱目前に本草綱目なく、後に本草綱目なしと言ふ如き大著述を完成した。明代に綱目以外多くの本草書があるが、何れも綱目の爲めに推されて知れぬものもあり、先づ支那の本草は李時珍に於て極ると言ふ狀態である。此等本草の變遷に就ては更に述べる事とし、一般漢藥に就ての大體は此れで終りとする。

393
756

終